

舞踏家とカメラマン

熊谷 博子

東京新聞 夕刊コラム『放射線』（現・『紙つぶて』） 2007年3月12日

「ああ何だかとんでもないものを観てしまった」と、その映画を見終わった途端に思った。畏怖と畏敬の念からだ。

『大野一雄ひとりごとのように』というドキュメンタリーである。大野一雄さんは、昨年100歳を迎えた世界的に著名な舞踏家だ。5年前に行われた、最後の公演前後の数ヶ月を追ったものだ。そしてこれは、老舞踏家と名カメラマンが、魂と魂、肉体と肉体を四つにぶつけ合い、時には共に踊るようにして作った映画だと感じた。撮ったのは大津幸四郎さん。72歳にして第1回の監督作品でもある。

95歳の大野さんは、腰をうち立つこともできないのに、稽古場で音楽が流れると、まるで床を転がり、這い回るようにして踊り続けようとする。そして突然カメラの前ににじり寄って訴える。「私にもう踊らなくていいと人は言うのか。私は踊りたいんだ」

映画のラスト、織部賞をもらうため車椅子で岐阜へ移動する。その舞台に座り込み、黒スーツに白いドレスシャツの正装で靴を脱ぎ、踊り出す。身体が動かなくとも、手の表情と内側から湧き出る思いで、あれほどの表現力を生み出すものなのだと、震える思いがした。

むろん、誰が撮ってもそうなるわけではない。大津さんは「三里塚」「水俣」と撮り続けた日本を代表するドキュメンタリー・カメラマンの一人で、私の師匠のような存在でもある。現場でいつも感じる撮影者としての執拗な発見能力。踊りが深まるにつれ、青年のようなしなやかさを取り戻す大野さんを撮りながら、目頭が熱くなったそうだ。“生の賛歌”として捧げたい、という。

東京のポレポレ東中野で、レイトショー上映が始まった。